

第2回 情報セキュリティ関連分野に係る技術に関する
施策・事業評価検討会
議事録

1. 日時 平成26年3月14日（金） 15:00～17:00
2. 場所 経済産業省本館4階西8左 商務情報政策局第一会議室

3. 出席者

（検討会委員）[敬称略・五十音順、※は座長]

- 後藤 厚宏 情報セキュリティ大学院大学 情報セキュリティ研究科 教授
田辺 孝二 東京工業大学大学院 イノベーションマネジメント研究科 教授
※徳田 英幸 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科委員長 教授
西村 敏信 公益財団法人金融情報システムセンター 監査安全部長

（事務局）

- 大崎 人士 商務情報政策局情報セキュリティ政策室
中谷 順一 商務情報政策局情報セキュリティ政策室
室井 佳子 商務情報政策局情報セキュリティ政策室
岡田 実 産業技術環境局技術評価室

富田 高樹 みずほ情報総研株式会社 経営・ITコンサルティング部 シニアコンサルタント

4. 配付資料

- 資料1 第1回情報セキュリティ関連分野に係る技術に関する施策・事業評価検討会議事録（案）
資料2 評価方法（案）
資料3 情報セキュリティ関連分野に係る技術に関する施策の概要
資料4 情報セキュリティ関連分野に係るに係る技術に関する施策評価用資料
資料5 評価報告書の構成（案）
資料6 評価コメント票
参考資料 実施者による自己評価

5. 議事

（1）今後の評価の進め方について

事務局から、資料2により評価の方法及び今後の評価の進め方等について説明が行われ、第3回評価検討会を书面審査にて実施される旨と今後のスケジュールについて了承された。

(2) 主な発言等概要

事務局から、資料3、4及び参考資料により、情報セキュリティ分野に係る技術に関する施策・事業の概要について説明があり、以下の質疑応答がなされた

【後藤委員】評価レポートとの関係を確認したいのですが、評価の対象は全体の評価と、資料3の13ページの(1-A)、(1-B)、(1-C)と(2)という、大まかな単位での評価のみですね。

【事務局】新世代情報セキュリティ研究開発事業は一括で評価することになります。

【後藤委員】そうしますと新世代事業の場合、内容は5件に分かれるわけですが、その総合点でいくのか、平均点でいくのか、意図としてはどう考えればよいのでしょうか。事業化のテーマもあれば、事業化に関係ないテーマもあるので、評価する際に悩んでしまいます。かえって個別のほうが評価しやすいくらいなので、足し合わせたものとして評価してもよいのか、評価の仕方として揃えておいた方がよいのではと思ったのですが。

【徳田座長】前回もこの(1-A)、(1-B)といった大きな括りで評価をされたのでしょうか。

【事務局】これまでも新世代事業としては個別の事業毎ではなく、この新世代事業として評価を出しています。

【徳田座長】そうなりますと後藤委員からのご質問のように、各事業を全て加味することになりますか。

【事務局】総合的に新世代事業としてどうであったかという形でお出しいただきたいということです。

【徳田座長】今話題になった事業化の評価で言うと、4.の評点をつけるときに事業化、波及効果についての妥当性に関して、全てがBならばよいのですが、AがあってもBもあってもCCCといったことになったとき、その場合は委員の方達が全体的に見ていただいて、ある種平均をとる感じでよろしいのですか、というのがこちら側の質問です。

【事務局】それで結構と思います。それぞれのA、B、Cが細かくあるでしょうし、組み立て方がよかったかというのもあるのでしょうか。それはサブテーマ扱いということになっていると思いますので、恐縮ですがそのような整理でお願いいたします。

【徳田座長】細かいことで恐縮ですが、資料6のファイルは委員の方々が多くを書き込んでいく中で、ページがずれていても構わないのでしょうか。

【事務局】はい。見た目は一切気にせずをお願いいたします。

【徳田座長】では、好きなだけ書いていただいて結構です。

【徳田座長】確認ですが、「2.(2)技術に関する施策の目的を実現するために、技術に関する事業(プロジェクト等)が適切に配置されているか」という評価項目ですが、私の理解では(1-A)は公募案件で実施したので、経産省はどれが採択さ

れるかに関してはコントロールできなかったのではないですか。たとえば、今回はバランスよく散らばっていると思いますが、たまたま極端な例で暗号案件の提案が4件来て、それが非常に良くて4件採択した場合、我々がみると、少し暗号に偏り過ぎているように見えます。「適切に配置されているか」という意味が、事業採択する意思決定のプロセスが適切だったのか、それとも、採択結果のバランスが、たまたまであるけれども公募であったのでバランスがアンバランスになったか、どちらのプロセスを評価してほしいのですか。

【事務局】その点ですと、この新世代事業を採択したときの過去の資料を見ると、実際30件ほど応募があり、その中からこれらの事業が採択されています。そのときに、情報セキュリティの関連分野ということで広く応募はしているのですが、実際に採択する事業がある一定の分野に偏ってしまうとそれはどうかという認識はありましたので、そうした意味で広めの分野で採択するようなことを、一応心がけていたということでございます。

【徳田座長】ありがとうございます。

【後藤委員】その観点から、広めに選んだものが正しかったのかという意見を書けばよいのですね。

【事務局】はい。

【徳田座長】参考資料にある自己評価をしていただいた結果は非常に助かるのですが、A-aの最後の6がA、A、BとなっているうちのBの説明で、「課題としては最終的に期間内に事業化までは至らなかった点が挙げられる」、と書いてあり、大文字のBの評価というのは、さきほどの資料6の15ページの基準からみてよいのですか。

【田辺委員】自己評価の場合のABCDはこれとは別だと思います。

【徳田座長】失礼しました。Bが「目標の通りの成果が得られた。予定通り実施できた」、Cが「目標を下回ったが目的は概ね達成されている／予定通りでなかったが目的は達成できた」、ということであれば、Cのような気がしたのですが、これは向こうの方がつけたからということでしょうか。

【事務局】こちらで修正をかけるということはしておりません。事業者で記入していた内容を、そのまま忠実に資料としております。

【徳田座長】わかりました。それで結構です。

【事務局】そうした意味では、評価した人によって非常に甘かったり、辛かったりということはありません。

【徳田座長】わかりました。ガイドラインは1ページ目に黄色の枠で囲ってあるところで書いてあるということで、ほかにご質問はございますか。

【西村委員】資料3の43ページの最後の部分で、「制御システムセキュリティの活動」というのは何か具体的に何かあるのですか。

【事務局】このツールはCSSC（制御システムセキュリティセンター）で、ファジニングツールとして実際に活用しています。

【徳田座長】期間内に EDSA 認証の取得はできなかったとのことですが、今の時点ではどうなのですか。

【事務局】まだ認定されておられません。かなりハードルが高く、認定されたツールはまだ世界で 2 製品のみです。

【徳田座長】わかりました。ありがとうございます。

【田辺委員】実施計画書の 69 ページを見ると、金額が 2 千万円くらいですね。なぜこんなに安いのかと人件費をみると、1 時間あたり 3 千円や 5 千円とあります。これは委託なのだから、もっときちんと払った方がよいのではないのでしょうか。

【事務局】この人件費の考え方なのですが、実際に当該実施機関の事業所、において実際に支払われている金額の実績で払っています。

【田辺委員】給料の実績ですか。

【事務局】実際に本人に払われる分と事業者負担分（福利厚生分）を足した一人あたりの単価を出して、その実績で出しています。この会社は比較的若い従業員が多く、単価が安いというのが実態です。

【田辺委員】ただ、それでは元気が出ないですね。別に優秀な人を雇い、きちんと給与を支払って開発せずに、今いる人の人件費を肩代わりするためにやっているようでは。本当にセキュリティの最先端の研究開発をしようとするのであれば、1 千万円から 2 千万円を出して優秀な人を採用してやらなければいけない気がします。もう一方で、東大では人件費が入っていないのですね。

【徳田座長】大学の場合、特認の方はチャージできますけれど、それ以外は。

【事務局】実施計画書の 53 ページに予算がありますが、ポスドク研究員という 1 名のみの人件費で計上されており、ほかに学生のアルバイトがあります。

【田辺委員】これは外注費ということで、外注化すると委託ではないので、給料プラス利益ということで、外注化すると倍くらい取れるのですね。ということで、直接受けると給料しか払ってくれないが、東大などを経由して、外注でもらうと倍額もらえる。したがって制度としてはどうか、というのもあります。

【事務局】実際の払い方の話になりますが、実施機関からの提案に基づいて行っているわけですが、応募したグループの中で実力が足りないということであれば、例えば研究員を呼んできて充てるということも当然できます。ただし、この事業者についてはそうしたことは特にしていなかったということです。

【徳田座長】この事業に対してはキャップがかかっている、例えば 2,500 万円以下で提案を書けとか、そういった縛りはないのですか。

【事務局】そこは特にはありません。ただし総額としての予算枠があるので、あまり高い金額を提示されてしまうと。

【徳田座長】彼らが知っているのは 14.1 億という総額ですね。しかし何枠が受かるかは公募期間にはわからないのですね。

【事務局】そうです。いくらまでの提案でなければ不可ということは言っておりませんが、

予算に限りがあるので、例えば 5 億円のプロジェクトなどは。

【徳田座長】それはやらないと思います。少し興味があるのですが、何卒採択しますということは言っているのですか。

【事務局】言っていない。

【徳田座長】総務省の例えば NICT の事業であれば、例えば総額 3.2 億円で 4 枠をこのテーマで取りますと言っています。こちらの方法では、提案する人達は、ややハイリスクのプロポーザルを書いたら落ちるかもしれないなど、相場観がわからないわけです。あえて経済産業省としては書かず、大きな玉も、小さな玉も。

【事務局】はい。事実関係を申しますと、総枠は示しているのですが、採択する事業の玉数までは最初の段階ではフィックスしておりませんでした。

【徳田座長】田辺委員のご指摘の件は、彼らが自主的に安く見積もってしまったということで、別に指導はしていないわけですね。

【事務局】特にしておりません。当然、この事業者が、誰かもう少し高い研究員を採用するという提案をしてきても、それは別に構いません。

【田辺委員】はい。理解しました。

【後藤委員】事業者には等級表があり、実際には社会保険などを等級表にあわせて払わなければならないので、おそらく実際担当した人がたまたまこの等級だったということかと思います。

【事務局】確定検査で実際にこの実施機関を訪問したこともあります、社長さんを含め、全体的に若い企業であるという印象です。

【後藤委員】担当した人の給料の何時間分、という計算を淡々とするしかなく、検査上それはごまかせないので、正直にやるとこうなったということだと思います。

【田辺委員】なるほど、わかりました。

【徳田座長】(1-B)のテーマについて 1 点教えて欲しいのですが、日本側で評価するとき、ヨーロッパ側に依頼するのと、認定費用は同じなのですか。

【事務局】大きな費用の違いはないと思うのですが、例えば日本で評価する場合、日本語のエビデンス、日本語の資料で構いませんが、外国で評価する場合は英語など現地の言葉に翻訳した資料を用意する必要があるという意味では楽になるのではないかと思います。

【後藤委員】期間はどうか。

【事務局】私が聞いている限り、ドイツでは現在非常に混雑していると聞いています。認証を頼んだとしても審査待ち時間などが発生するものですから、申請しても審査に着手してもらうまでに時間がかかるということです。

【後藤委員】実際にはポリティクスもありますね。ヨーロッパの場合、ポリティクスでブレーキがかかるので、それが回避できるだけでも効果は相当大きいはず。フランスなどでは認定を止めて自国を守ったりします。

【事務局】最後のほうに書いてありますが、実際に日本のメーカーが海外の評価機関で認

証を受けるとなると、日本のメーカーの秘匿情報のようなものもすべて開示して評価認証してもらう必要がございます。本来はあってはならないことなのですが、そこから情報漏洩のようなことになるという懸念もございましたので、いち早く国内にもそうした評価機関を整備したいという国側の思いがその当時ありました。そのような事業でございます。それから資料 118 ページのところに、前回非公表となっていたところですが、確認いたしましたところ現在は非公表にする理由はないということが確認できたため、今回は入れています。

【後藤委員】(1-C)の事業は最初の(1-A-a)と一体のようにも思えるのですが、実際にはどうなのですか。中身は聞いており、立場はよくわかっているつもりなのですが。

【事務局】事業の発想として別のものになっており、評価のためのツールを作るのがこちらの事業の目的です。その中で、東大で研究している要素も一部取り入れる形になっています。

【徳田座長】実際に取り入れたのですか。東大の成果がテクノロジー・トランスファーされているという意味ではよいと思います。

【後藤委員】期間はずれているのですよね。

【事務局】期間は一部重なっています。

【徳田座長】わかりました。

【田辺委員】(2)の事業の研究開発というのは、設備の構築に関する研究開発ですね。それができた後で、様々な設計の開発を行うということかと思います。ですから、設備のための研究開発を行い、5 種のプラントシステムを設置したということですが、研究開発をしてこのような成果が出たと言わないと、設置したから成果があったという現在の書きぶりでは、研究開発の成果があったということを明示的に書いていないことになります。設置することも重要ですが、施設の研究開発を行うことも大きな内容なので、今後それ自体の成果を書いていたいただきたいと思います。

【事務局】アドバイスをいただき、ありがとうございます。

【徳田座長】資料 3 の 150 ページの写真にあるような模擬システムは、コスト的にはどのくらいかかったものなのでしょう。

【事務局】まず設備そのものと、その後の演習をするためにソフトウェア的にまたさらに作り込んだ部分があるので、まずそのソフトウェア的に作るコストだけでも 1 プラントあたり数千万円かかります。

【徳田座長】ハードとしての各プラントはいくらくらいなのでしょう。

【事務局】スマートシティプラントについては 1 億円を超えています。

【徳田座長】スマートシティと書いてありますが、基本的にはグリッド的なものですね。

【事務局】これはアグリゲーターサーバーです。

【徳田座長】わかりました。

【事務局】化学プラントやビル制御になると、およそ 8 千万円くらいです。

【徳田座長】わかりました。1 件 1 億から 1 億弱くらいですね。ある種コミュニティビルドでそうした文化的なセンターができたという意味では、我々は非常に良かったと思っております。

【事務局】ありがとうございます。

【徳田座長】資金が切れた途端に火が消えてしまうと、皆さんからはどうしたのかと言われてしまうので、持続的にきちんと取り組んでいただきたいと思います。

【事務局】そうならないようにしたいと思います。

【徳田座長】以上で議事としてはすべて終わりましたが、全体を通して何かご質問等はございますか。

【田辺委員】事業自体は非常によいと思ったのですが、中小企業や技術系企業が公募に応募した内容をオープンにしてしまうことで、大企業が真似してしまうのではないかとあるとか、あるいはハッカーにこうしたセキュリティ対策をやることが明らかになってしまうといったことは、問題ではないですか。今回は事後評価ですが、公募の時点でこうしたテーマを採択します、中身はこうですとオープンにしてしまうことに問題はないのでしょうか。

【事務局】タイトルと事業者と金額はオープンになりますが、具体的な中身は公表しません。

【田辺委員】本日の資料を見ると、割と中身まで入っていますが、こうしたものは出ないのですか。

【事務局】この資料は公開を前提に作っています。事業者のほうでもこうしたものを作ったとアピールしたいという思いもあるようです。

【田辺委員】日本の場合、国内で出願している特許は多いのですが、世界で出願している特許はその 10 分の 1 であり、残りはすべて世界に垂れ流していることになります。ですのでこうした開発についても、公開すると海外にどんどん出て行ってしまうことになります。

【後藤委員】微妙なところがあると思います。例えば暗号などは、アルゴリズムを最初にさらけ出して、皆で叩いてもらい、これ以上叩けないだろうというところで標準になるという世界です。今回の東芝のフラッシュのように盗まれてしまう場合もありますが、セキュリティの方式などは堂々と出している場合が多いと思います。

【徳田座長】アイデア的な部分ですよね。さきほどの例であれば、ここは失敗したから、うちがやろうというところはあるかもしれない。

【事務局】そのあたりは公開までに改めて確認することにしたいと思います。

【田辺委員】検討会用はよいのですが、外部に公開するものはご留意いただきたい。

【徳田座長】企業にメリットがあるような形でお願いします。

【事務局】検討会の資料も公開を前提としていますが、機微なものについては、もちろん非公開にすることはできます。

【後藤委員】チーム構成などがわかるとかなり見えてしまうのですね。そうしたことは論

文にも書かなかつたりします。意外とそうした箇所の方がかえって危ない。研究体制などに個人名が入っていると、「そうか彼がやっているのか」となります。

【田辺委員】20～30年前までは欧米が先に出て、日本が追いかけるキャッチアップの形でしたが、今は日本もアイデアをどんどん出しているので、そうしたものをどこまでオープンにするかというのは、この問題だけではないが、考えないといけないと思います。

【徳田座長】基本的にはオープンでよいのですが、何をどこまでオープンにするかということなのだと思います。オープンにする方向は間違っていないと思います。

【事務局】確認したいと思います。

【徳田座長】コメントはどのくらいの分量を想定されていますか。委員のコメントをすべてANDでつなぐ形になりますか。

【後藤委員】文章で書いたコメントと、ABCで評価したものはどのように示されるのでしょうか。評価した個人名は出ますか。

【事務局】基本的に評価は平均点を出すために使います。文章は文章でマージします。誰が発言したかまでは出ません。

【徳田座長】他の外部評価において、委員の評価が半々で割れたときに事務局が一方的にどちらかに決してしまつて揉めることがあるのですが、今回は委員数が奇数なので大丈夫そうですね。

(5) 今後の評価の進め方について

事務局から、委員宛に評価コメント票を電子データにて送付する旨と提出期限について説明がなされた。

(6) 閉会

以上